

やりがいの感じられる作業学習を目指して ～地域の高等学校の中に開室された分教室1年目の取り組み～

田淵 健*, 名古屋恒彦**

(2017年2月15日受理)

Ken TABUCHI, Tsunehiko NAGOYA

Practices for Worthwhile Work Learning

1 問題と目的

知的障害教育においては、後期中等教育の場としての高等部のありようが、今日大きな課題となっている（全日本特別支援教育研究連盟、2012）。生徒数の増加に加え、障害の多様化が進んでいる現状が報告され（全日本特別支援教育研究連盟、2012）、高等部設置ないし拡充の必要性和、教育実践の充実の必要性の両方が求められていると言える。

そのような全国的な状況の下、岩手県においても、岩手県立盛岡みたけ支援学校高等部設置（2009年。小中学部と別校舎による2校舎制の実施）、岩手県立釜石祥雲支援学校高等部の岩手県立釜石高等学校内への移転（2015年）、岩手県立盛岡みたけ支援学校二戸分教室開室（2016年）と多様な形態での高等部教育が実践されている。

従前の高等部とは異なる、これら岩手県内における教育実践は、今後の高等部教育の充実のためには、いずれも内外に発信し、精練されていく価値のあるものと考えられる。そのためにも、それぞれについて、実践経過を整理していくことが有益である。

そのような問題意識の下、本報告では、最新の動向である2016年度における岩手県立盛岡みたけ支援学校二戸分教室（以下、「本校」）の初年度の

授業づくりを軸とした学校生活づくりの経緯を報告する。

なお、第1著者は、本校高等部主事として、実践に当たってきたものである。第2著者は、本報告の共同研究者として、本校視察や第1著者とのミーティングなどを通して、本報告の内容を外部の立場から検討した。以下の記載は第1著者の執筆したものを、著者間で確認し、確定したものである。

2 開室の経緯

岩手県二戸地区では、通学できる範囲に支援学校（養護学校）が無かったため、障がいのある子どもたちは隣接する青森県の支援学校へ進学、または遠方の支援学校の寄宿舎への入舎などというケースがほとんどであった。そのため、保護者の方々を中心に、この地区への支援学校の設置が強く要望されてきた。こうした背景を受け、平成20年に岩手県立盛岡みたけ支援学校二戸分教室小学部が二戸市立石切所小学校内に、平成25年には同分教室中学部が二戸市立福岡中学校内に設置された。そして平成28年4月、同分教室高等部として、本校が、岩手県立福岡工業高等学校の校舎内に設置された。

生まれ育った地域を離れることなく高等部生活

* 岩手県立盛岡みたけ支援学校二戸分教室、** 岩手大学教育学部特別支援教育科



開室式における生徒代表挨拶

を送ることができるということや、障がいのある生徒とない生徒が共に同じ校舎で生活することで、将来の共生社会の形成に向けた相互理解が期待できるということなどが志望の理由となり、当初の想定の3倍である9名の生徒を迎えて開室することとなった。

新設された学部であるため、これまでの実践の積み重ねがないことは当然ながら、基礎的な環境整備も十分とは言えない状況でのスタートとなった。しかしながら、期待に胸膨らませて入学した9名の生徒とそごご家族の思いに応えるためにも、生徒全員が生き生きと活動し、やりがいの感じられるような学校生活を早急に構築していく必要があった。学校生活づくりとして取り組むべき課題は多数あったが、将来の働く生活に向けた「作業学習」の充実こそが最も急がれるものではないかと考えた。

今年度、この作業学習をどのように立ち上げ、授業実践したか、また今後どのように充実させていくのかについて、これまでの取り組みの様子を振り返りながら考察したい。

3 取り組みの様子

(1) 教育課程について

職業教育の充実という観点から、作業学習を学校生活の中心に据える（小出、2014）こととした。週日課表の上では、作業学習は週12時間の実施となるが、弾力的な運用により他の教科

等の年間の授業時数を確保しながら、月曜日から金曜日まで毎日3時間を帯状の時間割で実施し、十分な活動量の確保と、見通しのもちやすさを考慮することとした。

(2) 作業種の選定と準備について（～3月）

他校の例などを参考にしながら、初年度の作業種は2種類（手芸と木工）と決定した。工業高校の教室2部屋を本校の作業室として改修し、木工室と手芸室が完成した。改修と並行して必要と思われる備品や教材の購入を進めたが、生徒の入学前でもあり、どのような工程を用意するか、製品として何を作るか、といった具体的な内容が決まっていなかったため、4月以降に様々な物品を要望することとなった。

手芸室の整備については二戸地区で裂き織りの工房の主宰をされている方に織機の組み立て方や材料の調達に関するアドバイスをいただきながら準備を進めた。木工室については地元の建築会社の方にアドバイスをいただきながら大型の工具類の設置などを行った。いずれも分教室中学部が開室した当初からお世話になってきた方々である。高等部が設置されることを我が事のように喜んでくださり、多大なご協力をいただいた。

(3) 生徒による作業班の選択について（4月）

生徒の入学後すぐに、オリエンテーションを行い、作業学習についての紹介を行った。取り急ぎ、作業内容を用意し、それらを2週間体験することで手芸班か、木工班かを生徒自身が選ぶこととした。保護者の意向も参考としたが、それぞれが自分なりに選択することができていた。5名が木工班、4名が手芸班となった。班については1年間の固定とはせず、半年が経過した時に改めて作業班の希望について確認することとしたが、9名全員が現状のままを希望した。自分で選ぶ、決めるという生徒の思いも尊重しつつ、今後卒業までの3年間で様々な作業種を経験して欲しいと考えている。

(4) 各作業班の取り組み

【手芸班】

開室当初は、物品の整理が終わっていない木工班の準備を全員で手伝うことにした。自分たちの学校を作ろうという意識が生徒、教師両者から感じられた期間であった。



横糸のアイロン掛け

手芸班の主な作業として、東北地方が発祥とされる「裂き織り」に取り組むこととした。布などの材料が無かったため、地域の方々から古くなった浴衣をいただいたり、地域の工房から糸をいただいたりのご協力をいただいた。作業をするための環境作りから皆で取り組んだ。横糸の準備では、浴衣をほどく、布を裂く、糸くずを取る、アイロンを掛ける、切って仕上げる、という作業を職員も一緒に分担して行った。その後、材料となる生地については、二戸地区の主要な産業である「縫製」の工場各社より、ご提供いただいている。

織機を使った裂き織りが開始できるまでに数週間かかったが、少しずつ材料が揃い、「自分たちで準備した」という手作り感のようなものを感じることができた生徒もいた。足踏み型機織り機と卓上型機織り機とを生徒が使用し、集中して織り進めている。織り上がった布を教師が加工するといった分業で様々な製品を作っている。県内の他の支援学校や福祉事業所においても裂き織りの製品作りは行われているが、独自性を出したいと考え、形やサイズ、裏地の付け方などの工夫をした。製品の一つに、縦置きできるペンケースがあり、他ではあまり見られないものであると考えている。また、木工班が作っているコースターのくぼみに裂き織りのコースターを丸く加工した物をはめ込んだ「コラボコースター」というものも製作している。



裂き織りの様子



「コラボコースター」



縦置きペンケース

【木工班】

4月当初は、まだ梱包されたままの備品を開梱したり、工具類に校名のシールを貼ったりと、生徒と教師が一緒になって作業場作りに取り組んだ。先述のとおり、手芸班のメンバーにも手伝ってもらい環境を整えることができた。

最初に作り始めた製品はホームセンターで販売されている2×4材等を使用した多目的な「収納BOX」の製作と、地元の建築会社から提供していただいた杉の端材を使ったコースター作りに取り組んだ。道具の使い方を覚えたり、もの作りの面白さを感じたりすることができたが、販売会や納品、プレゼントといった直近の目標がないままの作業であり、生徒にとって「そもそも何のために作っているのか」というテーマが明確ではない漠然とした活動になってしまっていた。

以前から、「二戸地区の特産品である、りんごの出荷用木箱を作ってみないか」という提案を保護者の方から頂いていた。樹脂や段ボール製のケースではなく、古くからの木箱での出荷が青森県及び岩手の県北地域では今なお主流で

あるとのことだった。しかし、木箱は出荷の時期だけ必要とされるもので、年間通しての需要は無いのではないかと、十分な作業量が確保できないのではないかと、という懸念から、生活単元学習として取り組むことが相応しい内容であろうと考え、木工班で取り組むことは想定していなかった。その後、農家の方からのお話をうかがっていくと「出荷の時期以外にも使用する」「大量に必要とするため、小屋にストックしておきたい」「昔は木箱を作っている業者があったが二戸地域にはなくなった。青森まで買いに行くことが大変である。」「中古の木箱は流通しているが、新品の木箱でりんごを出荷したい。」等、ニーズが高いことがわかった。必要とされるものを作ることで、生徒の自己有用感も高まるのではないかと考え、木工班の作業として取り入れることとした。

地元の農協の方を通じて、青森県三戸町の青果店で木箱を作っている方を紹介していただき、実際の作り方を見学させていただきこととした。使用されていた道具や冶具、手際よく釘を打つ様子をビデオ撮影させていただき、後日、木工班の生徒と共に見ながら作り方のイメージを膨らませた。

木箱には様々なサイズがあるが、工程を複雑にしないため、「大箱」と呼ばれる一番大きな木箱のみを作ることにした。取っ手の部分の釘打ち、側面の釘打ち、底面の釘打ち、点検・修理という工程を分担して取り組むことにした。



木工班で製作した木箱(大箱)

厚さが1センチ程度の板にはみ出さないように真っすぐ釘を打つことの難しさや、生木の状態で製材された板が乾燥により変形したり、縮んだりすることでの組み立ての難しさなど、スムーズに作業が流れるまでには時

間を要したが、釘を打つ場所を視覚的にわかりやすく示したり、使用する道具を工夫したりすることで自主的、自立的に取り組めるようになっていった。また、一定の作業活動の繰り返しにより習熟が促され、かつ見通しがもちやすくなる(名古屋、2010)という視点から、一人一工程というように分担した。だんだんと作業の正確さや速さが増し、より多くの箱を作ることができるようになっていった。その後、生徒自らが釘の飛び出しや木の割れなど、不良な箇所がないかを点検したり、修理したりすることができるようになっていった。

りんご農家の方からご注文をいただいて、12月現在で450箱納品している。この木箱の納品の様子が新聞等に掲載されたこともあって、その後も問い合わせ・注文をいただいている。木箱を積み込む際の生徒の表情は非常に生き生きとしたものであった。当然、代金もいただいて



側面の釘打ち



りんご農家の方への納品

いるが、「使って欲しい」「早く納品できるようにがんばりたい」と作業日誌に書くなど、お金以上に自分たちの作ったものが「使ってもらえる」「必要とされている」ということに喜びを感じている様子がみられた。

(5) 販売活動について

作業学習の時間に作ったものを一斉に展示・販売するいわゆる「販売会」というものは、現在のところ1回のみの実施にとどまっている。福岡工業高校の文化祭「福工祭」において、作業製品販売会を開催した。ちらし配り係、レジ係など役割を分担しながら接客を行った。生徒の多くが初めての販売経験であったため、自分たちの作ったものが売れることに対する喜び、やりがいを感じながら生き生きとした姿が見られた。

手芸班の製品「小銭入れ」「トートバッグ」「ペンケース」「しおり」等、早々に売り切れてしまったものもあり、受注という形で対応することとし、その後も継続して製作中である。

木工班の主な製品である木箱は農家の方に使用が限定されるため、やすり掛け・塗装を施した「アンティークボックス」として加工し、販売した。横積みして下足箱など棚として活用されるというお客様も多くいらしたため、今後は木箱と並行して製作していくこととした。

福岡工業高校の文化祭であるため、本校の関係者のみならず、数多くの方に来場していただ



文化祭における販売会

くことができた。売れたことで喜びややりがいを感じられたことは当然ながら、「〇〇は全部売れたけど、〇〇は売れ残った」と気にする生徒もいた。また、「横糸を細くして厚みを抑えてはどうか」「この箱に蓋を付けたものは無いのか」等、お客様から製品に対してのご意見を頂くなど、販売会を行うことで良い製品を作ること、販売することの難しさにも触れ、「仕事」「職業」に対する意識が高まる機会となったと言える。

(6) 産業現場等における実習について

作業学習の一環として、校内実習を前期・後期2週間ずつ計4週間実施した。今年度は1年生のみであるため、全員が校内での実習となった。木工・手芸に分けず、全員で一つの作業種に取り組むこととした。前期には染色・織物の作業に取り組んだ。後期には調理作業に取り組み、昼食（日替わりの定食）、パンの製造を行い、工業高校の先生方をお客様としての販売を行った。直接「ありがとう」などの感謝の言葉をいただいたり、味についての感想をいただいたりするなど、ここでも働くことに対する喜び、やりがいを实际的に感じ取るこ



豚汁作り(後期実習)



職員室での販売の様子

とができた。次年度からは2学年が産業現場等での実習を行う予定である。

4 おわりに

まだ開室から1年が経過しておらず、本校の作業学習のあり方について成果と課題を見出せる段階ではないが、東北地方が発祥とされる「裂き織り」、地元の名産品「リンゴ」の出荷用木箱など、地域性を生かした作業班を立ち上げ、生徒一人一人にあった活動が整いつつある。また、納品・販売を通して、地域の方々から感謝される喜びを味わい、やりがいや手ごたえが感じられるようになってきていると考えている。このことは学習指導要領の解説の中で、作業学習の指導に当たって考慮すべき点として挙げられている「地域性に立脚した特色をもつとともに、原料・材料が入手しやすく、持続性のある作業種を選定すること」「生徒にとって教育的価値の高い作業活動等を含み、それらの活動に取り組む喜びや完成の成就感が味わえること」「作業製品等の利用価値が高く、生産から消費への流れが理解されやすいものであること」(文部科学省、2009)といった内容に即したのものとなったのではないかと考えている。

販売活動については課題が残った。個別の注文に応えたり、納品したりすることはあったが大々的に販売会を実施したのは「福工祭」のみであった。今後は販売会を増やしたり、外部に販路を拡大したりするなど、より実際的な活動を増やし、生徒が満足感・成就感をより多く味わえるようにしていく必要があると考える。

二戸地区の商店や農家の方が出店する「なにゃーとよ市」というイベントが本校のすぐ近くの施設で毎月3回程度開催されている。こちらへの参加について相談させていただいたところ、「地域の学校としてぜひ参加して欲しい」とのありがたいお言葉をいただいている。今後は定期的に販売の機会を設け、テーマや目標を明確にしてよりやりがいを感じられる作業学習を展開していきたい。

作業種について、今年度は2種類であった。現

在は1年生9名のみ在籍であるが、次年度以降、学級が増え生徒数も増えていくこととなる。現状の2つの作業班では手狭で十分な活動を準備できない可能性がある。新たな作業班を立ち上げていくことを検討している。現在、地域の方から畑をお借りする方向で調整中である。二戸地区の名産とされる「雑穀」(ヒエ、アワ、イナキビ等)の栽培を行い、地域に根ざした作業製品づくりに取り組みたいと考えている。

地域の中で、地域の特色を生かした取り組みを行うことの良さ、意義は生徒自身が「今、ここで必要とされている」ということを実感できることにあると考える。今後も、工業高校の生徒を初めとする地域の方々とのつながりを大切にし、地域の特色を生かしながら、生き生きと学校生活を送れるように、やりがいのある作業学習を展開していきたいと考える。

5 参考文献

- 文部科学省 (2009) : 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編 (高等部)
- 小出 進 (2014) : 『知的障害教育の本質 本人主体を支える』 ジアース教育新社 pp.92 - 110
- 名古屋 恒彦 (2010) : 『特別支援教育「領域・教科を合わせた指導」のABC』 東洋館出版 pp.118 - 126
- 名古屋 恒彦 (2013) : 『特別支援教育研究』 673号、「作業学習」展開のポイント 東洋館出版社 pp.32 - 35
- 全日本特別支援教育研究連盟 (2012) : 『特別支援教育研究』 664号、特集「高等部教育の今を考える」 東洋館出版社 pp.2 - 28